

ある朝鮮人アナキストの伝記（四）

— 金 宗 鎮 伝 —

李 乙 奎 著
西 京 二 訳

十一 新民府の改編と韓族総連合会の結成とその事業

先生（金宗鎮）が新安鎮でそうしている頃、晦観は山市で白治と同居しており、先生も毎日のように山市へ白治を訪れていた。

そこで三人が鳩首会議を重ね、終わりに白治は、新民府改編は是也（先生＝金宗鎮）の計画案で行うことが良いと結論して、在滿朝鮮無政府主義者連盟の綱領を見て、我々と彼等が今後は表裏になり、一身同体となって、混乱と摩擦なく一致協力してゆき、目的のための教育と思想啓蒙・生活改善の指導は、連盟での責任とし、同時に我々の組織は全員で参加する事を原則とするものとした。先生と晦観も、白治がこうした理解と信頼を寄せたので、その意見をもって、即時連盟月例会議に白治將軍の要請を附議し、それを可決した。

先生は左のように新民府改編要領起草したところ、白治はその案に同意して、即時、山市・海林中間の石河駅前の僑胞農家で、新民府主要幹部会議を開き、数日の連続討議の上で在滿韓族総連合会を結成し、多年間の闘争史をもつ新民府は、歴史的な発展解

消をとげた。

韓族総連合会の組織大綱

一、本連合会の目的と事業

本連合会は、在滿僑胞の政治的・文化的・経済的發展向上を図ると共に、抗日救国の完遂のために、在滿同胞の総力を集結した僑胞の自主自治的協同組織体である。

二、本連合会は、本会の目的達成のために左の事業を行う。

- 1、僑胞の集団定着事業・僑胞の流浪防止・集団部落促成
- 2、営農指導と改良・共同販売・共同購入・経済的相助金庫設置等を目的とした協同組合事業
- 3、教育・文化事業即ち小学・中学の設立運営・各地組織の連絡及び僑胞の消息・僑胞の生活改善・農業技術指導のための定期刊行物発行・巡回講座・巡回文庫設置・成人教育と奨学制度
- 4、青壮年に対する農閑期の短期軍事訓練
- 5、中学出身者から軍事幹部を養成する為の軍事教育機関の設

立運営

6、抗日ゲリラ部隊の教育・訓練・計画指揮を行い、地方治安のために地方組織隊の治安隊の編成指導をする統率部設置

三、事業計画と執行部

各部落自治班は、班民総会を決議機関として事業計画、予・決算の審議及び、責任者と代表者の選挙を行い、区分会には各班代表者会議、地域連合会には区分会代表者会、総連合会には地域代表者及び区分会代表者総会を決議機関とし、事業計画、予・決算の審議、各組織との連関事項の審議、各部署責任者の選挙を行う。執行部の部署は、総連合会に、委員長・副委員長・農務・教育・軍事・財政・組織宣伝・社会保険・青年・総務の各部を設置し、各部には部委員長と次長をおく。渉外は総務部が当る。

各地域連合会以下の組織の執行部署は、総連合会の部署に準じて、その地方事情に応じて適宜に定める。

先生の起草した満韓族総連合会の組織要領は、以上のものと共にこの内容の組織を上向的に組織してゆくものとしていた。しかしそれに対して、組織は下向的に進めるべきだとするのが大勢の意見だった。

本連合会が完全な自治を主張するのならば、当然に基本的には部落単位組織から上向的に組織してゆくべきなのだが、満州韓僑の現実情と新民府の残存する組織実態が、理論に沿った実行を不可能とする実情から止むを得ず、下向的に各組織の委員を任命して組織を完了した後、各組織に合理的な選挙を断行し、再調整することとした。

そこでまず、総連合会の委員を任命した。形式は任命だが、主

要幹部の互選によったことは言うまでもない。

総連合会委員長に白治金佐鎮、副委員長に権華山、農務及び組織宣伝は也金宗鎮、教育晦観全明源(李乙奎)、軍事李鵬海、他に韓青岩・鄭信・朴耕天・姜石泉の諸氏が各々の部委員長に、李達・金野雲・李徳載・嚴亨淳等の諸氏が部次長に各々任命された。これが同年八月初旬のことだった。

こうして、本部を構成する総連合会の委員が決定したので、地方組織を進める方法として、まず地方に対し組織宣伝部が中心となって、その隊員を派遣宣伝に向け、各地の組織を進める責任に果せる適格者を探し、まずその人達を各地責任者に任命していうと、即時組織宣伝隊を派遣した。

海林を中心として、以西、一面波へは第一隊、以東の五站へは第二隊、吉林から敦化への沿線に第三隊を派遣すると共に、先生は派遣した隊員達の活動状況を視察のために出発を予定していたが、白治の勧告で総連合会の諸般計画のために出発を中止した。

組織宣伝隊が出発して数週間が過ぎて、各地から反応が届いた。地方住民の歓迎が到る所で起きていると言うことが、直接連絡でまた間接で伝わってきた。こうした報告に接して、組織宣伝の責任者としての先生の気分はずれた。このことは、自己の計画の正確性と自己の隊員に与えた指示内容が、現実にかなうものとの自負はしていたが、その計画指示が思わぬ効果を生み、同胞達が生活の安定を見たならば、我々の抗日救国の基盤になるのを熱望しているのが分ったからだった。

くりかえして指摘するまでもなく、現在の満州事情の中では、住民達は新民府にせよ其他の独立運動団体にせよ、一種の権力団

体としか見ていなかった。また団体自身も支配者然として、韓僑農民に対しており、理由のないすきまが両者間にはあった。そこに赤色分子と日帝の走狗が、中間から離間を図るのに対して、何等かの対策の求められる微妙な時期に、新民府自身が進んで解体をし、先頭に立って同胞達の不満を代弁して、不幸と困窮を慰労し同情を寄せたのだから、僑胞の歓迎を受けたのは当然だった。

すべての事を協力協調と自主自治で進める勢力として、誰の支配にも、誰の力にも依存せず、同胞の生活の安定した発展を図り、又確立した生活の力で抗日救国を闘う人々と共に、協同扶助し一致団結する真正な救国団体であると主張していたが、こうした事実によって韓族総連合会は、同胞自身の団体であると認識されるに至った。何故ならば、これまでの団体は、極く一部の人々を組織しただけで、農民を指導することもなかったが、これから、皆さん自身が安全と便利と利益と将来のために、自分の部落から自治班を作り、その班が集まって総連合会を作り、その分会が地域連合会を作り、それが更に集まって総連合会を作る。こうしたいき方により、同胞農民が自己の利益と国のために組織する、自主自治の自己の機関であると説明する班を、多方面に派遣し、代表と責任者を選び出せば、多方面に亘る運用をひきうけると、明白に訴え確約したからだった。

こうして、これまでの様々の団体が、権力をふるい威勢を張り、共産党と同じく謀略を無条件にあやつる式の行動をせず、農民自身の意見を尊重し、利己的な私心を見せず、共に働き時を顧みず生活の向上発展を図り、流浪を止めて、部落毎に集結を進め、安全を隣保相助して支えていったので、誰にとっても反対する理由

がなかった。また土地の交渉斡旋には、中国地主と中国官庁との交渉を代行して行なったので、彼等にとっては有難いことこの上なく、さながらその福は、まっくらな夜中の光明と言えた。そうした事情で各地の組織は急速度に進行していった。

順風に追われるように、各地では順調に組織が進行して行き、先生も、先生の僚友の自治將軍も、喜びを形容しようもなかった。それもそのはず、危機に当面していた新民府から、まだ具体的に運動を始めていなかった先生とその同志が、色をもった主義者と結んで、歴史ある新民府の解体に対する一部の同志の異端にもかかわらず、進行させたについては、自治將軍としても、人に言いしれぬ心配があったが、千万多幸にも各地から歓声が相次いで、雀躍すると言ったことがあったためだった。そこで、自治は先生と晦観を招き、自己がこれまで、先を思うあまり識見を欠き、不安の色をみせた失礼を謝ったのだった。

韓族総連合会の初出發が、こうして急進展を遂げていったので、日帝の領事館とその走狗の慌てぶりは言いようもなく、又、間島共産党事件以来陣容を再整備して、各地で地下から各方面に浸透すべく、機会をうかがう赤色分子達にとっても、絶体絶命の悲報の以外の何ものでもなかった。それでこの一党達が、東西にかけ廻って、発惡の機会をうかがっていると言う風説も絶えなかった。

この事は、韓族総連合会としても推測していて、韓族総連合会の組織の完全な地方では赤色分子達は、絶対に入りこめぬのは明白ではあったが、彼等の発惡の防害工作を予想して、連合会から各地に、日帝走狗と赤色分子の蠢動を特別に監視すべしとの時急の指示が伝えられた。

組織の第一、二、三隊、即ち中東・吉敦兩線地帯の組織宣伝隊の工作が終り、東京・寧安及び、注清・延吉・和龍等、東滿一帯の組織に着手する計画と同時に、人材難を解決するために時急な北滿中学の期成が考えられた。

広漠な地域に、現在も大小不同の区域に、形式的な小学が数多くあるにはあったが、将来總連合会が、各班別に各々小学を設立するならば、当然に北滿には数個の中等学校を設立する計画を立てる必要があった。現在、總連合会が発足して月余にして、北滿中学校設立をしようとする理由には、一挙兩得というべきものがあった。總連合会が各地に組織を進め、運営が適正に進められる必要が生れてきて、組織と同時にその幹部を訓練してゆき、各地の組織が同一の精神と方法の規制の下で運営してゆくための訓練機関が、この学校であるとして、北滿中学を速かに期成し、それをこの訓練所として運用してゆこうとするものだった。

しかし、先生と晦観の發議した、北滿中学期成には、意外にも幹部達の中から反対意見が起きた。反対意見は主に、我が總連合会の發足直後に、困難な幾多の基礎的な準備工作が必要とされるのに、先後を顧みず、学校設置に着手すると言うのは、ものの本末を誤るものであり、又、中学校を先生の計画通りに設立するには、校地と実習用地に広大な適地が必要となり、それをどこに求められようかと、更には財政の乏しい我々にとっては、土地を購入したにせよ賃借したにせよ、北滿の僻地に、必要とする教員をどこに求めるのか、と言ったものだった。

これに対して先生は、校地は適地を発見してから、地主に交渉して賃借することにし、現金がないならば、教員は国内外に散る

青年同志中に資格者を物色し呼び寄せれば足りるし、建物は土皮の粗末なものにして人力動員して建設し、子弟を学校に入れる実力のある家庭は言うまでもなく、それに欠ける人達も、我々の実力をふりしぼって、多数の学生を集め、設備をすれば、学生数の心配の必要はなく、我々の計画は学生を寄宿舎におき一切を自給自足でまかなうのだから、そうしたことは杞憂にすぎないとした。更に学校の發足は、各地での幹部の人材養成のためにも必要である事を力説し、反対論を説得して満場一致で賛成を得、その席で地方の人士と連合して北滿中学期成会を発足させた。こうした先生の敏腕に、白冶將軍はただただ感嘆し讃辞をおしまなかつた。

そして期成会と連絡しながら、校地を物色した結果、海林と山市中間の西南十五里程の所にある高嶺子に、一千畝の面積の土地を見つけ、地主との賃貸契約を進めようと、吉林で、先生は地主と三回の交渉を持った。先生一人だけではなく、白冶晦観と共に三人で更に二度の交渉で、ようやく許諾を得た。

中国人地主達は、我が同胞達との関係上、恒々苛酷な条件をつけ、莫大な搾取で富をなしていた。流浪する僑胞に、農資金を高利で貸し、農土を交渉すれば、韓国人には信用がないと拒絶したり、高額な地代で苛酷な賃貸条件を課したりしていた。

先生が初めにした校地交渉も、こうした例にもれなかつた。それで、数次の交渉にも白冶將軍が出席し、中国地主も先生の熱誠に感服したのと、白冶將軍の声望に打たれたことで、韓中好隣の民族友誼のために、学校用地を提供することとした。賃借料は地点を確定した後で適当に契約する事となった。

十二、韓族総連合会の発展と、赤魔との衝突による白治將軍遭難

こうして、組織が着々と進行しているうわさは四方に伝わり、韓族総連合会が教育機関をも整備しようとしている事で、各地から住民達の祝賀代表が送られ、また激励の声も伝えられた。のみならず、そこそこに散在する農民と流浪する農夫達も続々集結し、集団部落を形成し、自治を打ち立てていった。

日々総連合会が発展を遂げるや、共產主義者も遅れてはならずと、総連合会が結成されて二ヶ月ほど後に、日本から赤色運動の展開のために、金南天と言う者が新安鎮に先生を訪れ妥協を請うた。先生はそれに対し、人道に背く共產主義を清算し、人間の本来の姿をとり戻し、人間の自由と尊厳を尊重する人達が、民族の解放と人類の自由解放の隊列の先頭に立てるのだ、と答えた。金南天等は、そうであるならば、彼我の是非は民衆の前の討論に判断を委ねようと申し入れた。先生は、この申し入れに快く許諾した。先生の住む洞りの富農宋泰準方で、各々の主義主張を洞民の前に発表する約束をし、日時を定め一大激論がたたかわされることになった。

そこには先生をはじめ、晦観・李達等三人の演士と金南天他二名が出席して、聴衆は洞民百余名であった。

両方のする自己主張はくい違い、相手方の欠点を追及しようとして先生は、彼等の罪悪、即ち満州での彼等の反民族的、非人道的な行動を列挙して、彼等こそ民族の罪人であり、人類の叛逆者だと断罪し、ソ連の走狗は速に去れと叫べば、聴衆達が万才を叫び、

一斉に呼応した。そこで彼等十余名の一党は、形勢不利を感じて脱兎のように逃亡していった。

この後、しばらくの間に、このうわさは広まり、共產徒党が総連合会に断罪された事は中東線一帯に広く伝えられた。その事から、共產徒党は総連合会に水火をはさむ敵との認識をもち、対抗を策し始めた。共產党は作党を謀り、襲撃を企て、ロシアで暗殺隊が訓練されるといった様々な風説が流れてきた。

それに前後して、十月初め、総連合会の事業である精米所が建設された。代表者は勿論白治委員長であったが、農務所管として直接の責任者は先生であった。その精米工場の新築、機械の設置等の監督と指示には、先生と白治が交代してあつた。

当時、中東線一帯には、韓僑農民の農家は相当数となっており、その開拓農地で生産される米穀も、毎年数万石に上っていたが、吉林城周辺には、同胞達の精米工場がないため、委託販売業者の中国商人が中間で暴利をむさぼっていた。そこで韓族総連合会が、同胞達の便宜と利益を図ろうとする見地で、この精米工場は設置されたのだった。

こうした事業を計画したのだが、本来から営利的な事業としての隘路と難関は少なくはなかった。その時間的余裕のない中にも、四方に派遣した組織工作隊の報告を討議し、毎晩に数十通もの回答及び、指示通信を書き、吉林に校地交渉に、また精米工場の管理経営に責任は重り、先生ほどの精力家をして三十壮年とはいえ、健康を気づかぬわけにはゆかなかった。

こうした白治委員長を先頭とした韓族総連合会幹部一同が、救

国至誠に奮闘する中に一九三〇年の新春が開いた。同志達の希望と期待は昂まった。この新年に当り、韓族総連合会の運動が、具体的実践的画期的に進み、新安鎮の先生の寓居で成功を祝い、決意を新にする祝杯はあげられた。

期待と希望にあふれる祝福の新年劈頭に、北満に大きな悲運が起こされた。それは、全民族運動にとっても不幸な事態だった。満州の運動に挑戦する不慮の出来事だった。好事魔多しとは言え、この事態は、この民族にとっては大きすぎる試練だった。

一九三〇年一月二四日午後四時頃、白治委員長は、工場修理を指示するさなか、共産党員金奉渙（一名金一星）の操る一党の朴尚實（一名朴尚範・金信俊）の拳銃狙撃を受け、殺害された。在満韓僑二百万は前途の希望を失い、日帝走狗と赤魔達は喜びの声をあげた。

ひきつづく難局を前に巨人が倒されたことは、満州の独立運動陣営にとってかけがえのない損失であった。故人を想い、人々はこの民族の前途を考え痛哭するのだった。意外の変事にあたりながらも、先生はつとめて冷静に処そうとした。

即時、権華山委員長と建議し、非常幹部会議を招集すると共に、事態收拾を協議した。

その会議では、この事態の根本原因の科明と共に、この兇徒の一党を完全掃蕩すべき事と、この事態によって地方韓僑社会に起きた混乱と動揺の收拾を図り、まず地方に派遣した組織宣伝隊員を召還して、各地情勢を検討しようとの、先生の提議が満場一致の賛成を得、その召還が断行された。同時に軍事委員長李鵬海同志を中心として、青壮年中の機敏な人々を選抜して臨時治安隊を

急造し、中東線一帯の四隣を嚴重防衛しつつ、中国治安当局と緊密な連絡を取りながら犯人の搜索に着手した。そして白治將軍の葬儀一切は、晦観全明源が責任者となり、喪家の遺族そして権副委員長との合意の下に、葬儀委員会を広範圍から組織して、故白治金佐鎮將軍社会葬々儀委員会の名称で治喪の準備をすすめた。だが嚴冬中には零下二十度以下、三十度を前後する北満で直ちに埋葬することは不可能なので、とりあえず死体は安置し、土地の解凍後、正式葬礼を挙行することとした。

このようにして、権委員長老人を世話しつつ、先生は心血をそそいで、事態收拾と整頓に中枢的な任務を果たした。

軍事委員長李鵬海氏の指揮下に組織した治安隊の一部は、ついに海林駅付近で、赤魔の巢窟を急襲し、金奉渙外一名を捕え、同時に彼等の文書を押収して、この兇計が金奉渙の指揮であったことと、直接の下手者が朴尚實であったのを突きとめた。下手者朴尚實はただちに嚴重に収調べ数日の後、金奉渙外一名と共に処断されたのだった。

それで、この一党数名は処断したが、それで問題が全て解決される事にはならなかった。

中東線一帯の地域が、ソ満国境地帯に近く、赤色分子の侵透路であったので、彼等を処断しても潜伏蠢動する同様の一党の風説は絶えなかったからだ。

人心は動揺をつづけ、治安隊は勿論のこと、全員が警備に立って四囲を嚴重に警戒し、幹部全員も地方の安全のために昼夜動員された。

この騒乱の中に、各地方に派遣していた組織宣伝隊員が再び戻

り始めて、次々に地方の人心は落ち着き始めた。先生は勿論、新安鎮にも戻らず、山市で徹夜指揮をとりつづけ、当地の中国人達が旧正月に騒ぎ立てる中に、韓族総連合会を中心とした韓人部落の全体は緊張した悲痛な雰囲気の中にあつたのは言うまでもない。

旧正月を過ぎ、陽ざしも暖り始めると、韓族総連合会と、故白治將軍葬儀委員会は、葬儀挙行に着手すると共に、一方で北満中学期成会事業と、地方組織問題に対する分科別の討議をつづけた。

雍華山・吳智泳両翁は、白治將軍埋葬地を求め四方を踏査した後、山市海林中間の石河駅東北の山麓にそれを定め、整地をすませ四月中旬に葬礼を挙行した。満州各地からは勿論国内外からも、多数の弔客が雲集して、数千名が集り、故人の偉業をたたえしのび、民族の前途を想いながら、悲しみにひたつた。その気配は山川草木さえも打つものがあつた。

この葬礼中にも、先生は悲痛と疲労におそわれながらも、弔客の身の保護のために、李鵬海同志と共に警備に奔走した。また帰還する沿道にも安全を考え、四方に幹部を派遣指揮して、事故予防に神経を配つたのだった。

こうした中にも、倭敵の領事館は、中国地方官憲をおどしては、葬礼の数日前には墓所を打ちこわし、白治將軍の寓居を搜索するなどの発悪を止めはしなかった。(歳月が流れ情勢が變つて、日帝が満州事變を起すと、將軍の遺族は、遺憾を移し、故郷の洪城郡下に移葬したのだった。)

日帝の領事館が、將軍の墓所と寓居の搜索したのと共に昂まつた地方住民の恐怖を利用して、赤魔達は、様々な風説を流し、報復の暗殺団が再侵攻を始めたとか、放火団が来襲するとかを言い

たてては、人心の恐怖をあおり、陰謀と謀略をめぐらした。韓族総連合会は、そこで、対外的な組織工作と北満中学期成会工作を臨時に中止して、先生が先頭に立ち、幹部一同と共に防衛を嚴重にし、地方治安と人心安定に力を注いだ。勿論中国治安当局とも連絡を緊密に取りながら、赤魔達の根拠を打つのに誠意をもって協力したのだった。

こうして月余が過ぎ、活動資金の枯渇した中に、どうした訳か、吉林から、古嶺子の土地の主人から北満中学校地の画定と賃借契約を結ぶための代理人が派遣されてきた。先生は緊急幹部会を開催して対策を協議した結果、事勢のやむをえず、代理人に対して、白治將軍の遭難の経過を説明し、事態の收拾後、即時吉林へ往訪する事を約束して、その代理人を伴い、古嶺子の地点を画定した後、地主に前後事情をくわしく伝えて、後を託したのだった。

あと一回になりました。愛読者の皆さん、編集の皆さん、おくれてすみません。(訳者)

△定期購読者・募集中▽

月刊『リベロ』(アナキズム情報紙)

購読料 年間一〇〇〇円(送料含)

発行所 京都市左京区田中門前町二八の五

リベロ社(振替 京都四四四三三)